

裏窓の流星群

雑さ
賀が

聖さ

登場人物

まや (27才)
由布 (27才)
真理 (27才)
亜紀子 (27才)
純子 (27才)
雪江 (27才)

まや 中華料理屋の個室。

かなり広い。部屋が貸切られている。料理はまだ並べられていないが酒はある。

入口の傍に看板が立てられている——県立松葉中学校五組同窓会——

ドアがスーッとあき、まやが顔をのぞかせる。

まや (看板を読む) 県立松葉中学校五組同窓会、OK、ここだ。

と言うがすぐに顔を引っ込めてドアを閉めてしまう。が、また

まや (ドアから顔を出して) 松葉中学校五組同窓会。フッフ。

と笑ってまた顔を引っ込める。そして、また顔を出す。

まや ああ、この、誰もいない部屋をソオッと覗く快い緊張、その部屋が目的の場所であることとを確認出来た深い喜び、これこそ精神のバーレスクだ。(中に入る)中に入ってしまつた。これはいしたことはない。新しい部屋に入る前には三度そのドアをあけなさいと何かの本に書いてあったのがよく分る。初めての部屋に一人、初めての床を踏む。ここでは誰もが詩人だ。ドアをしめて外の音が遮断されると、この空間は私のものだ。この広が

りは私に属している。……やがて、淋しい哲学が始まる。
だが今は卑俗な時間を生きなければならぬ。お入り、由布！

ドアの外は反応がない。

まや 由布！

反応なし。

まや やれやれ、トビラを開ける力のない者もいる。

まや、ドアをあけてやる。外からおずおすと女が入って来た——今や人気絶頂の青春スター、桂木由布である。

まや 泣く子も黙る青春スター、桂木由布もこうなっては形なしだな。

由布はなぜか視線がうつろで、部屋の中をボンヤリと見回している。まるで意識がここにはないように。

まや 予想通りまだ誰も来ていない。あと二時間もあるのだからね。バカ騒ぎの前の知的な時間が静かに流れている。われわれが作戦を練れるのは今のうちだけだ。始まってしまえばもうまともな会話は交わせなくなるだろう。君は喧騒の渦に巻き込まれ、私はその外でラジオ体操を繰り返す。

由布 成り行きまかせの花火が上がる。

まや そう。そうならアウトだよ。

由布 怖いねえ。

まや 何だよヒトごとみたいに。だいたい何があったか知らないが、突然記憶喪失なんかになっちゃって、フン、見事な早業だね。まるでおとぎ話だ。

由布 その記憶が上手に戻るかしら、今日の会で。

まや ま、同窓会ってのは思い出遊びの記憶めぐりみたいなものだからね。君のねじれた意識に強力なメモリアル弾をぶち込んでくれるといいのだが。

由布 こちらから先制攻撃をかけちゃいけないかしら。ズドンと。思い出してくれい。まや 君は誰だ。

由布 ハイイ、泣く子も黙る青春スター桂木由布！ らしい。

まや それが記憶喪失だったら。

まやと由布 どうなる。

まや え、どうなる。

由布 追いつめちゃいや。

まや スキャンダル雨が降る。

由布 雨降って地固まる。

まや 固まらないよ。流れちゃうのさ。何もかも、きれいさっぱり。

由布 スキャンダルはせっけんなの。

まや そうさ、大切なものまで洗い落としてしまう白さが自慢の大せっけんだ。これまで何人

のスターがこのアワの中に消えて行ったことか。

由布 あわただしいのね。世の中って。

まや いいかい、今日は同窓会だ。話題は当然昔の思い出に集中する。ネ、憶えてる？ あの

川べりでスカートに包み切れない程のすみれ草を摘んだこと。あの草原で膝頭が熱くなる

まで四つ葉のクローバーをさがしたこと。あの谷間の姫百合、青い山脈、白い栈橋、黄色

いカラス。そこで君が知らない知らない憶えていないわじゃ済まされない。

由布 知らないものは知らないわ。

まや しかし君は相づちを打たなければ。

由布 変なこと言うと逆にバレちゃう。

まや そう。だからどんな話題にも対応出来る相づちを打てばいいんだ。

由布 そんなものあるかしら。

まや いくらでもある。とにかく昔のことを懐しがってりゃあいいんだからな。とりあえず四

つ憶えろ。第一、ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ、ハイ。

由布 ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ、ハイ。

まや ハイは余計。第二、オオ、亡び行くものは美しい。

由布 オオ、亡び行くものは美しい。

まや 第三、皆過ぎ去ってしまったことだわ。

由布 皆過ぎ去ってしまったことだわ。

まや 第四、あなたも変ったこと。

由布 あなたも変ったこと。

まや 以上、憶えたね。

由布 ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ。オオ、亡び行くものは美しい。皆過ぎ去って

しまったことだわ。あなたも変ったこと。OK。

まや 忘れるなよ。

由布 忘れるもんか。ええ、忘れませんとも。私には記憶がないのだから。私の頭の中はカラ

ッポ、何でも入るさ。だからこれからたくさん憶えてやるんだ。今はよんだ灰色の脳み

そを記憶のペンテルで塗りたくってやるんだ。数え切れない程の色が頭の中で溶け合って、渦を巻いて。

まや やれやれ、にぎやかだこと。

由布 頭の中はお祭りだ。

まや 今にそうなるさ。しかし人は忘れてしまいたいことが山程あるのに今の君にはそれが無い。どちらが幸福か。まだ時間は十分ある。トイレにでも行って相づちを憶えるんだ。

由布 皆、トイレで憶えるの？

まや あそこは一人になれる唯一の場所だからね。

由布 もしトイレで記憶を積み上げるのなら、トイレへ行けば忘れていたことを思い出せるかも知れない。

などと言いながら二人は出て行く。

しばらくして、「こんちわア、お待たせー」と勢いよく真理が入って来る。

真理 れれれれ、誰もいらっしやらない。おかしいぞ。松葉中学校だろう。えーと。(と、手帳をみたりする) 何だ、十六時からじゃないか。十四時からかと思っていたよ。たくさんあるんで混乱して来たな。十六時からだと、えーと……ウム、港川小学校は間に合わないな、ウン、仕方がない。今日はここに出て十九時三十分からの柳町小学校、それでおひら

きにするか。ムヒヒヒヒ、私こそ、泣く子も黙る同窓会ジャックの思い出泥棒さ。ホテルやレストランを駆け回り、華やかなパーティーへまぎれ込んでごちそうや記念品をせしめるのさ。月日が変われば人も変わる。多勢の中では誰が誰やら分らない。同窓会でのおしゃべりは簡単、懐しい懐しいを連発していればいいんだ。バレっこないよ。ムハハハハハ、神出鬼没の真理ちゃんは、背泳ぎの名人です。思い出求めて時間の河をスイスイ。どこまでもさかのぼって行きます。どこまでもね。オオ、懐しい、懐しい。

を連発しているうちにやはり「懐しい」を繰り返しながら、亜紀子と純子が登場。

亜紀子 ホント、懐しいわア、純子、あんた。何年振りかしら。懐しい。

純子 懐しいってもんじゃないわよ。亜紀子。あぎれるほどだわ。なっつかしいって感じ。

亜紀子 そう、なっつかしいのよね。ウブ、ヒイ、昨日の酒は効いた。

亜紀子と純子が真理を認めるのと、真理が二人を認めるのは同時であった。

三人 アッラア、お久し振り！

二人、真理に飛びつく。

三人 懐しいわあ。

純子 どこにいたのよオ。

真理 ちょっと、そのトイレに。

純子 いやあねえ。どこで生きてたってこと。

真理 地上だけど。分りきってるわ。

純子 やだ、あいかわらずねえ。？ちゃん。

と、勢いにまかせて「ちゃん」は言ったのだが名前が出て来ない。

純子 あんた、誰だっけ。

真理 ハ？

純子 亜紀子、憶えてる？

亜紀子 畜生、昨日から頭の中は天国だ。

真理 誰だっけて、やーだ。それはないでしょう。純子。やだ。やだやだやだやだ。私よう。

亜紀子 私かあ、そうかあ。

純子 私って誰。

真理 バカみたい。私よオ、私。

純子 ア、そうかあ、ゴメンゴメン、でも誰だっけ。

真理 いいの、いいの名前なんて。時が変われば人も変わる。人が変われば。

亜紀子と真理 名前も変わる。

純子 そ、そうだね。

真理 そうさ。ま、とにかく飲もう。

亜紀子 ア、思い出した。この人。

真理 ギク。

亜紀子 雪ちゃん、雪江ちゃんじゃない？

純子 そう言えは。

真理 そう、そう。やっと分ったか。雪ちゃんよオ。

純子 雪ちゃんかア。

亜紀子 雪ちゃんよオ。

真理 ダメじゃない。忘れちゃ。

亜紀子 乾物屋の雪江さん、改めて、お久し振り！

真理 葉屋の亜紀子ちゃん、お久し振り。

亜紀子 アラ、私の家はふとん屋よ。

真理 同じことよ。ネエ、ペンキ屋の純子。

純子 私の家はうどん屋だけだ。

真理 もういい。難しい話は終りだ。とにかく飲もう、飲もう。
純子 よし、雪ちゃんに乾杯するか。

で又一人の女が入って来た。

女 こんにちは。

純子 いらっしゃい。お久し振り。

女 雪江です。

純子と真理 ええ？

真理 とにかく飲もう、飲もう。

純子 だって雪江さんはこっちじゃ。

真理 とにかく飲もう飲もう。

亜紀子 飲もう、飲もうか。ハイ、私は何でも憶えていますよ。きっと今日の同窓会の花形だ。

純子 (女に) あんた、本当に雪江さんなの？

雪江 らしいんです。

純子 らしいって、自分で分らないの？

雪江 ええ、その。

真理 そのとは何だ、え？ オイ、君、いい加減なことを言うんじゃないの。メー！、

亜紀子 ネ、山猫先生、憶えてる？ 英語の。私、そいつからラブレターもらってさ。

雪江 いい加減なことしか言えません。私、記憶喪失にかかっているんです。

純子と真理 ええ？

亜紀子 記憶喪失でも何でもこいってんだ。

純子 じゃ、昔のことは何も憶えていない。

雪江 ええ、昔のことはおろか、つい最近のことまで。つまりは私が、どこで生まれ、どこで育ち、何を考え、何をして来たのか。それら私に関するすべてのことが、すべてのものが、まるっきり記憶にないのです。憶えていないのです。家族らしき人達はいろいろ言ってくれるのですが、私自身、思い出そうとしても、思い出そうとしても、頭が痛くなるばかりで、何も出てきません。私には過去がないのでしょうか。

真理 過去がなくても、今、今がある。君は今を生きたまえ。むしろ汚れた過去などない方がいいかも知れない。

亜紀子 ゲタ屋の新井くん、憶えてる？ よく数学教えてもらったわ。

雪江 今を生きるにも明日を考えるにも、やはり自分が何であるかを知らなければいけないわ。ここへ来ればそれが分るかも、ここへ来れば記憶が戻るかも知れない。それを期待して私は今日、皆さんに会いに来ました。皆さん、どうか私に、楽しかった昔の美しい思い出のかけらを投げ与えて下さい。どうか私に、楽しいはずの明日を教えてください。私は今日、

時間を取り戻そう。

純子 よく分ったわ。協力しましょう。出来るだけあなたの記憶を回復させるようなお話を上げて上げる。私達の憶えていることなんてたいしたことないけど、小さな断片が互いに作用し合えば大きな力となるわ。

真理 そうだ。歴史は大衆の記憶の集合によって語り継がれると言って良い。

純子 今、あなた程同窓会の必要な人はいないでしょう。あなた程昔話の似合う人はいないと
思うわ。

雪江 ありがとう、皆さん。ありがとう。記憶が戻ったら、私の過去に登場して来るすべての人達を集めて盛大な同窓会をやるわ。雪江という小さな窓を通して大きく開けた世界がそこに形成されるの。

亜紀子 簡易食道のおかみさん、引き算が出来なかったのよね。フフ、もうつぶれたかしら。
真理 やりたまえ、おおいにやりたまえ。ウワッハッハッハッハ。

そこへドアがソツと開き、まやが顔を見せるが、その顔に真理のバカ笑いがまとも
に飛んだのでビックリして引っ返めてしまう。

真理 いやあ、楽しいですなあ。オ、とにかく飲もう。時間がない。

純子 アラ、時間はあるわよ。これから始まるんだから。

真理 私にはないの？ サ、乾杯、乾杯。

と皆にグラスを持たせ、ワインをついで回る。

純子 今日は由布も来るんですって。

亜紀子 由布って、あの桂木由布か。

純子 そう。泣く子も黙る青春スター。

真理 成程、由布がねえ。あの子も変わったもんだ。あんなに無口でおとなしかった。

純子 アラ、そうかしら。彼女、昔からチャラチャラしてたわよ。

真理 そう、そうだったよねえ。修学旅行の時なんかバスの中でマイクはなさなかったっけ。

純子 ウンウン。

真理 あたり。

純子 え？

真理 いえ、内輪の話。

亜紀子 由布のお母さん、キャバレーに勤めてたのよ。よく教頭先生と腕組んで歩いてたわ。

真理 今や娘はたいした出世だ。畜生、今日はいらんとせびつてやれ、早く来い来い。

まや もう来てるよ。

真理 え？

いつのまにか、まやと由布がグラスを持って立っている。

真理 アラ、由布、お元気。

と、まやに飛びつく。

まや 私は由布じゃないんだけど。

亜紀子 由布はそっち。

真理 そう。もうすっかり変わっちゃって。

まや 間違えられる程似てはいないがね。

純子 由布、よく来てくれたわね。

真理 どう？ じゃんじゃんかせいでる？

由布 ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ、ハイ。

まや (咳ばらい)

真理 あの頃って、まるで昔のことみたいに。このオ、今だって結構いい思いしてるくせに。

畜生、少しはこっちに回せ。

由布 皆過ぎ去ってしまったことだわ。

真理 何だい。もう使っちゃまったのかい。さすが、スターは派手だねえ。

純子 由布、私達は皆、あなたを誇りに思っているのよ。

真理 そうさ、金より名誉だ。

純子 ちょっと黙っててくれない。

真理 成程、沈黙は金か。すべては金だ。

亜紀子 ア、それから、川向こうの一軒家に住んでいた安井先生、音楽の。奇麗だったわ、あの人の。

純子 由布、テレビで見ているわよ。凄じやない。やるじやない。

由布 オオ、亡び行く者は美しい。

純子 亡び行く？ 何言ってるんのよ、あなた。これからよ。

まや い、いやね。彼女少し疲れてんだよ。何しろスケジュールがギュッと詰まっているからね。

純子 ウン、分る分る。でも、まや、あなたも大変ね。桂木由布のマネージャーとして。

亜紀子 まや、昔からあなたたち二人は大の仲良しだったけど、あなたが由布のマネージャーやってるって聞いた時はビックリ。

純子 まやはクラスでも頭のきれいなキャリアウーマンタイプだったもの。

雪江 ウワー、皆、私のことを忘れてる。話題が向こうに集中している。クワー。

純子 アララ、すっかり、すっかりだあ。

まや おや、雪江じゃないか。ネ、雪江だろう。

純子 ご名答。

まや ヤア、元気かい。

雪江 ウ、まあね。

まや どうしたい。こっちへ来いよ。

雪江 いや、ここがいいす。世話ないす。私は、こいつと話してっから。(とグイと酒をあおる)

亜紀子 暗い、暗い飲み方だ。まるで鉛を飲み込むように。

雪江 由布さんとか言ったね。へへ、私を憶えていらっしますか。もちろん、憶えていらっしやらないでしょうね。あんたには憶えなきゃいけない台詞や歌が山程ある。

由布 あなたも変わったこと。

雪江 変わった！ オオ、私を憶えてくれたのですか。忘れないでいてくれたのですか。

ラッキーだ、こりゃ。で、どう変わったのですか。今の私は昔とどう違うのですか。昔はどうだったのですか。

亜紀子 安井先生、私たちの憧れだったわ。

由布 皆過ぎ去ってしまったことだわ。

雪江 そうです。その過ぎ去ったものは何ですか。今はないが昔確かにあったものは。

まや これこれ、彼女を一人占めしてはいけません。桂木由布は皆のものだ。

真理 待った！

まや ホウ、君は沈黙は金だったんじゃないのかね。

真理 黙っていても金にならないのが現代だ。桂木由布さん、確かにあなたは誰にも独占されないだろう。しかし彼女との思い出ぐらいは彼女に独占させてやりたまえ。

まや フン、由布の記憶はたくさんあり過ぎていちいち選り出して分け与えるなんて、出来な
いぞ。

純子 まや、聞いて、彼女は記憶喪失なの。

まや 記憶喪失！ 誰が！ 冗談じゃない。由布は正常だよ。記憶の神様だ。

真理 由布じゃない。雪江、雪江がだ。

まや 雪江？……ア、雪江か、ア、ハハハ、ハハ、何だ、そうか、雪江か、アハハハ。

真理 何が嬉しいんだ。

亜紀子 あの崩れかかった防空壕、どうなったかしら。

まや え？ ハ、ア、こりゃ失礼、いやね、芸能界をわたり歩いてるうちに、すっかりゆがめられちまって、悲しい時にも突然笑い出したりするんだ。真意はこの笑いにはない。

亜紀子 あそこでよく隠れんぼしたな。

真理 ヘン、都合の良いゆがめられ方だ。

まや そういう君は一体誰だ。私の記憶にはないけど。

真理 とにかく飲もう飲もう。

まや もう飲んでるよ。君は誰だ、ホント。

真理 いやですよ、旦那。あつしを忘れちゃあ。へへ、ま、とにかく一杯。へへ、こいつが
思い出してくれまさあ。

亜紀子 チ、こんなの頼っちゃダメだ。

純子 アア、思い出した。あんた確か。

真理 そうですよ、へへ。

純子 真理ちゃんじゃない。

真理 ええ？ えそんなのありかよ。

純子 そうよ、真理ちゃんよ。もう全然違っちゃってるけど、何となくおもかげが。

真理 (傍白) まあ、マリって名前はどこにでも転がってるがね。怖い偶然。

まや 真理ちゃんねえ。

純子 ホラ、ウソばかり言ってる、皆からウソつき真理ちゃんって言われてた。

真理 ウソつき真理ちゃん？

まや ああ、ああ、いたいた。あのバカか。

真理 あのバカ。

亜紀子 ウソつき真理ちゃん、皆からつまはじきにされてた墓石屋の娘。

真理 墓石屋だって？ オイオイ、君たち。

まや それから、よだれの真理ちゃん。

18

真理 よだれの！

純子 ウンウン。こんな風に手拭いかけてさ。中学生にもなってよ。ネ、由布。

由布 オオ、亡び行く者は美しい。

真理 冗談じゃない。亡んでたまるものか。

雪江 由布さんの言う通りだわ。よだれの真理ちゃん。確かに過ぎ去って行くものは懐かしい、亡んで行くものは美しいに違いない。でも私には、その亡んで行ったものがないの。いいえ、あったのよ。あったんだわ。あったんだわきつと。だから、それが何であるか分らないから結局、あったってことにならないし。何もなかったら、何も亡んでいないのだし、そうしたら、ウン、でも、亡んだものが美しいのなら、亡んでいないものは美しくないってことでしょう。だったら今のこの世の中は汚いってことよね。ああ、私、一体何言ってるんだらう。

由布 あなたも変わったこと。

雪江 だからどう変わったのよ！

亜紀子 よくあの防空壕で隠れんぼしたっけ。

由布 ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ、ハイ。

雪江 からかってんのね。私が皆忘れちゃったと思ってバカにしてるんだわ。来るんじゃないか
った、やっぱり。

まや そんな風にとるなよ。彼女はただ昔のことを語っているだけだ。

19

亜紀子 あそこに隠れば絶対に見つからなかった。

雪江 同窓会なんてしょせん、記憶力の良い人たちだけが集まって思い出競争をする極めて閉鎖的な会合なんだわ。私の出る幕じゃない。

純子 逆よ、それは。記憶力の確かな人、思い出をいっぱい持っている人はこんな所に来ないわ。むしろ自分の過去があいまいな人、楽しい思い出のない人が、それらをさがしに来るんだわ。

真理 そして楽しい思い出を求めるといことは、今がとても辛いからなのさ。

亜紀子 フフ、山猫の奴、ラブレターなんか出しやがって。

真理 今は冬の時代だ。ぶざまな厚着で寒さをしのいでいるが、身体の芯は冷えきったまま。

亜紀子 へへ、キザに英語でね。

真理 いつもブルブルふるえている。

雪江 あたたまりたい。少しでもあたたかくなりたい。ネ、やっぱり皆さんの体温が必要です。

純子 そう。私たち、時間の中に凍結してしまうのはゴメンだわ。

亜紀子 返事なんて出さなかったわ。私の英語で何が書けるってんだい。

まや ウーン、雪江の思い出ねえ。おとなしくて目立たない子だったからなあ。

亜紀子 川向こうの安井先生、ありゃあ女の鏡だよ。

真理 よだれがぬれていると風邪ひくよ。

純子 そう言えば、(雪江に)あなた、子供が好きだったわねえ。

まや 記憶喪失の人に昔のことを聞いてどうするんだ。ウン、思い出したぞ。雪江の子供好きはちよいとされた評判だった。

純子 日曜日なんか近所の赤ちゃん一日中子守りしててさ。

雪江 まあ、そりなの、そんな人なの。

真理 自分のことだぜ。

雪江 ええ、でも何だか自分のことのような気がしないわ。

真理 君のときさ、他の誰でもない。雪江だけのことだ。よく思い出してごらん、ホラ、ホラ、ホラ。

まや バカ、急には無理だよ。

亜紀子 それから駐在所の有田、私に色目つかいやがって。

真理 今でも子供は好きだろう。

雪江 分らない。

亜紀子 川向こうの安井先生は皆の憧れの的だった。

真理 大学は児童学専攻でしょう。

雪江 ウウン、理学部の物理学科だって。

真理 フムフム、きつとゆりかごの研究でもしてたんだ。

雪江 部屋には素粒子関係の本がたくさんあるわ。

まや 素粒子、こりゃ難しい学問だね。

由布 あなたも変わったこと。

純子 ホント、ウソみたいな変わりよう。

亜紀子 安井先生、とても優しくなったわ。

まや どうしてだろうね。亜紀子、そのへんの事情知ってるかい。

亜紀子 われわれも安井先生を尊敬していた。

純子 ダメよ、こりゃ。すっかり、すっかりだわ。

真理 子供好きの少女が物理学に転向した。ロマンだなあ。少女マンガのいいネタだ。

亜紀子 安井先生の教えてくれた唄は、なぜかお別れの唄が多かったねえ。ネエ。

と突然由布に向かう。

由布 ああ、あの頃は、皆過ぎ去って、亡びゆく。

まや オイオイ、急に向かうなよ。ビックリするじゃないか。

由布 亡びゆくものは楽しかったわねえ。

まや もういい、もういい。

亜紀子 ヘン、安井先生こそ本当の乙女だ。

純子 ア、それから、雪江、唄も上手だったわ。

真理 そうそう、いつも民謡大会の花形だった。

純子 そんなじゃないわよ。唱歌。音楽の成績は由布といい勝負だったんじゃない。

由布 あなたも変わったこと。

純子 何言ってるの、あんた。

まや だからあまり由布に話題を向けるなって。雪江のことは由布なしでも語れるだろう。

亜紀子 安井先生、行っちゃったのよねえ。

由布 オオ、亡びゆくものは美しい。

亜紀子 安井先生、憶えていますか。ホラ、お正月に、川向ここの先生の家で、トランプの神

経衰弱をやったこと。

純子 文化祭なんかでも由布とデュエットしてたわ。

亜紀子 先生はあのゲームが大好きでしたね。神経衰弱、あれこそ記憶の刃のぶつかり合い。

私たちは朝から晩まで、何度も何度も神経衰弱をやりましたね。何度も何度も。

純子 そして卒業式では。

真理 そうそう、代表で唄ったんだよね。

純子 いえ、唄いませんでした。

真理 そうそう。唄わなかったんだ。

亜紀子 安井先生、行っちゃった。

まや なぜだろう。卒業間近には、もう雪江は全然唄わなくなっていた。ひどく落ち込んだんじ

ゃ。

雪江 アラア。

亜紀子 (由布に) ネ、あの防空壕、まだ残っているかしら。

由布 ああ、あの頃は本当に楽しかったわねえ。

純子 そうそう。唄を忘れた雪江は同時に子供にも関心を示さなくなった。

雪江 まあ。

亜紀子 安井先生に乾杯。

由布 あなたも変ったこと。

真理 子供と唄が大好きな女の子が子供と唄から離れて行った。子供と唄、ウーム、何か秘密

めいてるな。

亜紀子 安井先生のガキがどうしたって！

由布 オオ、亡び行くものは美しい！

真理 まるでひん死のライオンだね。

純子 安井先生のガキ……。

真理 グワォー。

純子 黙ってる！

真理 こちらはヒョウカ。

純子 まや、私たちをとりこにした美人の音楽の先生は何てったっけ。

まや 美人の音楽の先生か。

亜紀子 安井先生のバカヤロー！

まや 安井先生だ。

純子 そう。雪江はその安井先生にとってもかわいがられていた。安井先生からたくさんの唄を

教わったのよ。

まや ウン、由布、由布もだよ。安井先生は由布のために作曲もしてくれたんだ。

真理 フムフム。

純子 安井先生には、子供がいたわよね。

まや いたな。しかし生まれたのはわれわれが卒業をひかえた秋か冬だったように憶えている。

雪江 ヤスイ先生……。

純子 その子供は。

まや 思い出した！ 誘拐されたんだ。

亜紀子 神経衰弱、神経衰弱。

亜紀子、完全に酔いつぶれている。

真理 その子供が今は立派に成長して、雪江と結婚したのか。

まや メチャクチャなこと言うな。子供はすぐに返されたんだ。

純子 でも犯人は分らなかった。

まや それと雪江とどういう関係があるんだ。
純子 もっと思い出してよ、もっと。
真理 もっとか、ウーム、ウーム。

と身体に力を入れる。

真理 ア！

まや 何だ。

真理 ちょっとトイレ行ってくる。

真理、いそいそと退場。

まや 何だ、あいつ。

純子 安井先生は私たちのアイドルだった。唄だけでなく、色んなことを教えてくれた。親身になって面倒をみてくれていた。ところが子供が出来た途端。

まや 気持は子供の方を向いてしまった。

純子 子供の方を向いたきり、もう私たちの方へは振り返ってくれなかった。

まや われわれは取り残されてしまったんだ。

雪江 ヤスイ先生……。

純子 取り残された者たちは、安井先生を自分たちの方へ取り戻すために。

まや ゆ、雪江がやったって言うのかい。

純子 そうは言っていないわ。でも、まるつきし関係ないとも言えないでしょう。ネ、雪江。

雪江 ああ、頭が痛い。

純子 雪江、あんた、いつ頃から記憶喪失になったの。

雪江 分らないわ。でも家族の話だと、二か月前からおかしくなったって。

まや 二か月前と言うと。

純子 この同窓会の案内状が出された時よ。

まや この同窓会は一体誰が企画したんだ。

純子 分らないわ。出席の返事はこの会場に出すようになっていてるだけでしょう。

亜紀子、苦しそうに吐く。

まや じゃ、誰が主催か。

純子 分らない。それよりも、雪江、案内状持ってる？

雪江 ええ、ここの地図が入ってるんで。

と出して純子に渡す。

純子 松葉中学校同窓会、左記の要領で開催致します……お待ちしております。安井、安井！
まや あんたの案内状にはこんな署名あった？

まや ないよ。印刷屋の案内文だけだった。

純子 私の方も。

まや 由布にもなかった。なのに雪江だけ。

純子 差し出し人が安井となっている。

まや そ、それじゃ、安井先生の子供を誘拐したのは。

でドアがボタンと開き、「お待ちせえ！」と真理が入って来る。

雪江 ああ、頭が、頭が割れそう。

純子 そして安井先生はそれを知っていたんだわ。

亜紀子 み、水、お水ちょうだい。

まや 雪江はこの案内状をみて、ひどいショックを受けて。

純子 に違いないわ。

亜紀子 ああ、胸の中が火事だわ。誰か、誰か消してよ。熱い、熱いの。

雪江 頭が、頭が離れちゃう。頭がとれそう。

由布 オオ、亡び行くものは美しい。

純子 でも犯人は二人組だったと言う話よ。

まや じゃ、雪江の他にもう一人。それは誰だ。

純子 分らない。でもその人もきつと、雪江のようになっていられるかも知れないわね。

亜紀子、更に激しく吐く。

真理 ここは病人と哲学者の部屋か。

まや 何をボンヤリ突っ立ってるんだ。早く雪江を連れ出さないか。

真理 OK、ここは空気が悪過ぎる。まるで田舎のかわやだ。

真理、雪江を外に連れて行く。

純子 私は亜紀子をみて上げなくちゃ。

純子、亜紀子を立ち上がらせる。

純子 サ、ちょっと外へ出しましょう。この程度で吐くようじゃ立派なアル中にはなれないわよ。
 亜紀子 マネよ、マネだけ。アル中のつもりをしているだけ。
 純子 フン、バカラシイ。

純子、亜紀子を連れて出て行く。
 すると又真理が雪江を連れて戻って来た。

まや なぜ戻って来たんだ。

真理 いや、行く所がなくてね。

まや 冷たい風にあてる。

真理 冷たい風、ハア、わかりやした。世間の冷たい風に十分さらして来ましょう。しかしここよりはました。ここの思い出はくすんだ色をしている。もっと明るい奇麗な同窓会でもさがしましょうね。

真理、雪江を連れて出て行く。

まや 同窓会はどこへ行ってもくすんだ色をしているよ。いや、皆、くすんだ色に見えるのだ。たとえ思い出そのものがしろがね色をしていても、それを見るわれわれの視力はひどく衰

えている。思い出はね。優秀な老眼鏡で覗くものだよ、さて、由布。

由布 あなたも変わったこと。

まや 今は二人だけだ。取りつくるわなくてもいいさ、どうだい、疲れたらう。

由布 ウウン、この方が楽。だって同じことを言ったらばいいんだもの。

まや 成程ね。しかし私の前では楽をしないでくれよ。サ、由布、思い出してくれ、本当のことと言ってくれ、と言っても無理か。君が記憶を失ったのは確か二か月前、この同窓会の案内状が届いてからだ。案内状には特別なことは書かれていなかったが、君はその頃、雪江から電話を受けている。そこで何が話されたか知るよしもない。しかしそれをきっかけとして君がこんな状態になったのははっきりしている。だとするともう一人の誘拐犯人は。

由布 追いつめちゃいや。

まや いや、責めているんじゃない。もう昔のことだ。たとえ君が犯人だとしても、子供はちゃんと返したんだ。それより問題は、君がそれを思い出してしまっただ。多分これ位のショックならすぐに記憶喪失はなおるだろう。しかしその時この誘拐の記憶も一緒に取り戻してもらっては困るのだ。思い出さずに、永久に思い出さずに、君が数知れない芝居の台詞を憶えては忘れて行くように消してしまわなければならない。芝居の台詞のように……そうだ！ 芝居の台詞だ。君は芝居の台詞の中にこのいまわしい思い出を封じ込めてしまえ。そうすればある日突然思い出してもそれは芝居だ。芝居なら誘拐をしようが人を殺そうが許される。由布、分るかい。君は安井先生の子供を誘拐した。しかしそれは芝居の中

でだ。君は単に一つの卑俗な誘拐犯を演じたに過ぎないんだ。

由布 誘拐犯に過ぎない。

まや サ、台詞を言ってみろ。君が今まで憶えた台詞を。

由布 あたしは——かもめよ……違う。あたしは——女優よ。ふん、そうよ！ あのひともこちらにいる。ふん、そう、構わないわ。

まや 憶えているのか！

由布 台詞なら憶えているわ。なぜか。

まや そうか、それは芝居が全く非日常的な空間の中にあつて、君の人生の記憶にはひっかからないからだ。こりゃあいぞ、由布。君は安井先生のことを芝居の中へ追い込んでしまえるかも知れない。

由布 ヒースクリフ、早く春が来ればいいと思わない？ そうしたら、ふたりでどこまでもヒースの野原を歩いてゆきましょう。

まや そうだ、そうしてその中に、私は安井先生の子供を誘拐しましたって台詞を入れるんだ。

由布 そして私たちが約束したように、彼は夜、庭のあづまやへやってきたわ。私は安井先生の子供を誘拐したの。

まや うまいぞ。もうこれは芝居の台詞だ。

由布 このあたしがそんな手紙をもらってなだめられるなんて、そんなこと絶対ないわ。安井先生の子供を誘拐したのはあたしなんだもの。

そこへいきなり亜紀子が飛び込んで来る。

亜紀子 安井先生の子供を誘拐したのはこの私なんだ！

まや 何だって？

純子が亜紀子を追って入って来る。

亜紀子 私一人でやったんだ。

まや どうしたんだい。アル中が急にソリアスになっちゃって。

純子 吐いちゃったのよ、全部。吐いたらまっさおになっちゃって

亜紀子 吐いたらね、一緒に昔の罪も吐き出しちゃったの。安井先生、ゴメンナサイ。

まや 本当の話かい。

純子 ウソよ。亜紀子がそんなこと出来る訳ないじゃない。

亜紀子 出来るんだ。出来るからやったんだ。

純子 ウソ

真理 (いつのまにか雪江と戻っている) 本人がやったと言ってるんだからそれでいいじゃないか。やったこととしてあげな。

まや しかし雪江がやったことははっきりしているんだ。

真理 それでもさ。ヘン、昔のことなんてどうだったか誰も分らないのさ。分りっこないんだ。むしろ過去は今の私たちが作ると言ってもよい。

由布 だって言ったじゃないの、あたしは頭が痛くなったから鎮静剤のまないといけないのに、もう一つしか薬が残ってないって。だから、私は子供を盗んだのよ。

亜紀子 安井先生の子供を誘拐したのは。

純子 誘拐しなかった。

まや え？

純子 そう。亜紀子は誘拐しなかったのよ。

真理 どういうことさ。

純子 あの誘拐事件が起こった時、私たちクラスの何人かの女の子もヤッタと思ったのよ。いいぞオッてね。だって安井先生は子供が出来て以来、私たちのことは全然かまってくれなくなっただもの。だからあの誘拐はスカッとした快挙だったわ。逆転ホームランて感じ。でもその裏側で、先を越された、やられたという感じがないでもなかった。むしろ、畜生よ。その犯人に激しい嫉妬を抱いたもんだわ。皆、私が、私がと思っていたことを先にやられてしまったんだものね。

由布 あたしとヒースクリフの間は誰も引き離すことはできない。

純子 亜紀子は特にそうだった。安井先生に一番かわいがられていたのは、亜紀子だったから。

冗談だけど誘拐を言い出したのも亜紀子だったかも知れない。

まや それが雪江たちに先を越されて。

真理 失望は当然のことのように酒を求めた。

亜紀子 ウソ、ウソよ！ 純子の話は皆ウソソッパチ、作り話だわ。いいこと、安井先生の子供を誘拐したのはこの私なんだから。私だけなんだから。誘拐したんだから。子供を抱いて山吹色の田舎道を走って冷たい防空壕に隠れていたんだから。だいたい色のしま模様の夕焼けがとがめるように斜めにさし込んでいた。だいたい色のしま模様の夕焼けが、しま模様の夕焼けが。

亜紀子、泣き崩れる。

35

由布 明日になるとだれかがやってくる。だれか特別な人が、それとも何かがおこる。同じよ

うに特別なことが、安井先生の子供を誘拐したのは、この私。

純子 アレ、由布も、由布、今何て言ったの。安井先生とか何とか。

まや 芝居の台詞だよ。たくさんの台詞の中には安井なんて人物ぐらい出て来るだろう。彼女は

はね、今、台詞病にかかっているんだ。

真理 台詞病？

まや そう。あまりにも多くの芝居を忘れ切らないうちにすぐ次の台詞が入って来てしまい、

34

台詞と台詞が押しくらまんじゅうしているんだ。だから時々、何かの台詞が飛び出して、自分の意志とは無関係に思わず喋ってしまうことがあるんだ。若い俳優のよくなる病気さ。

純子 まあ、かわいいそうに。

真理 で、治療の方法はないのかね。

まや ない。ま、もつとも、芝居の台詞が出て来ない程の重い現実を抱え込めば別だがね。それより、雪江の他のもう一人の犯人は誰なんだろう。

真理 ウーム。

純子 もしかしたら、真理ちゃん、あんたじゃないの？

真理 ウワ、とうとうこつちへ回って来たか。ウン、よし、いい、いい。私ってことにしておこう。犯人は私です。ジャーン。

純子 ウツつき真理ちゃんは最後までウツつきねえ。

真理 ウハア、ま、とにかく飲もう飲もう。

突如、部屋の電話が鳴る。一番近くにいた雪江がとる。

雪江 ハイ、かえでの間です。え？……ハイ、ああ、来れないと言うことですね。ええ、ええ、分りました。ハイ、よろしく伝えます。じゃ、どうもわざわざ……ハイ、失礼します。

純子 欠席の連絡？

まや 誰だい。

雪江 大概真理さんですって。

純子 とまよと真理 ええ？

まや そんなバカな。

純子 だ、だって真理ちゃんはここに。

由布 オオ、亡び行くものは美しい。

まや 君は真理だろう？

真理 え、ああ、ま、とにかく飲もう飲もう。

純子 あんたは一体誰よ。最初は雪江って言ったり、次には真理って言ったり。

真理 もじもじ。

まや 真理ちゃんじゃないんだね。

真理 え、いや、その。

亜紀子 この人は真理ちゃんじゃない。本当の真理ちゃんは額のところにほくろがあるんだ。

真理 ハア、そんなものがあつたんです、ねえ。

まや 出て行きたまえ。ここはわれわれの同窓会だ。

純子 あんた、今はやりの同窓会ジャックじゃないの？

真理 そうさ、そうだよ。ごちそうになったね。じゃ、次があつから。

まや 何て奴だ。われわれの思い出を踏みにじり、もて遊びやがって。

純子 思い出ろぼう。今に時間の憲兵隊につかまるわよ。

由布 皆、過ぎ去ってしまったことだわ。

真理 へへ、じゃ、じゃあね。

雪江 待って、あなたには思い出がないの？

真理 ないね、そんなもの、ハハ、バーイ。

真理、行きかけて立ち止まる。

38

真理 雪江さん、実は、私も、記憶喪失なんですよ。未だに治っていない。その上あんたと違うことは、私は一人ぼっちだってこと。ある日気がついてみたら町のまん中にぼつんと一人。だから本当に私がどこの誰だか、どこで生まれ、何をして来たのか、かきもく分らないのさ。

雪江 まあ、だからこんな風にして。

真理 そう。同窓会を片っ端から回ってるのさ。いつか私の同窓会にめぐり会えるんじゃないかってね。いや、同窓生に会わなくてもいい。他の人たちのさまざま思い出の中から自分の過去のヒントがみつければと思ってるんだ。だって皆、ネ、同じぐらいの年じゃん。同じ時代に生きた女の子だもの、たとえ友だちでなくともどこかでつながってんだよね。

その細い細い糸を、私はみつけ出したいんだ。その糸さえみつければ、同窓生なんていらないのさ。その糸をこの手でつかめれば、私はもう同窓会には出なくなる。

由布 その糸はまだ。

真理 残念ながらみつからない。随分たくさん同窓会に出たのに、全くみつからないんだ。

ネ、皆、同じ年なのに、一体どこで生きているんだろうねえ。どうしたんだろうねえ。何があつたんだろうねえ。何が、フフ、お喋りが過ぎたようだ。又文学をやってしまった。ア、もうじき他の人たちも来るね。この部屋も賑やかになる。パーティーのはじまりだ。

おめでとう、おめでとう、皆さん。私は出て行こう。

まや 真理、君は真理で通せ。われわれのウソつき真理になるんだ。ここに、いろよ。

真理 ヒトの思い出をおかしてはいけない。君たちは君たちで糸をつむぐんだ。そしていつか

私にも届くよう、強い糸を出してくれ。さようなら。

雪江 これからどこへ。

真理 今日はまだ一つ同窓会が残っている。

39

真理、出て行く。

と同時に廊下の方から、信じられない程の多勢の同窓生たちがどよめきをもって押し寄せて来る。